

働こう!サンバしよう!

ともに未来を創り出そう!

Vamos trabalhar e sambar!

Para construir o futuro juntos!

<完全版> (読了まで約19分。お急ぎの方は一番最後に要約があります)

サウーヂのテーマ案「働く」(仮)について!

私たちは、2026年浅草サンバカーニバルで演じるテーマを「働く」(仮)と決定しました。メンバーからの公募で決まったわけですが、あまりにも幅広いテーマであるため、どう表現するかについて頭を悩ませました。人生100年時代、働かなくても済む少数の人を除けば、長い現役時代をずっと働きながら過ごすわけです。百人百様の働き方があります。面白いテーマには違いない。でも、浅草の本番はわずか50分です。この短い時間で、何をどう伝えたらいいのでしょうか?

そこで、人々はこれまで、どう働いてきたのか?そこを考えてみるところから始めましょう。

昔も今も、人々は働き、社会を作ってきた

人類が最初に歩み始めたとき、多くの時間を費やしていたのは、食べものを探すことでした。小動物をつかまえ、木の実を拾い、腹を満たしました。狩猟や採集に必要な道具を、石や木で作り出すのも大事なことでした。身にまとう毛皮や、雨風をしのぐ住まいを工夫して作ることも、やはり必要でした。

人間は社会を作り、助け合う生き物です。やがて食べられる草の実を栽培することがはじまり、人々は集まって農耕を行い、その収穫を配分するために街を作りました。手仕事によって作られた器や布、山や海の恵みが市場に持ち寄られ、交換されました。そこには泥棒も生まれましたし、それを取り締まる者も生まれました。

交換と分業によって職業が生まれ、生産性が上がっていきました。貨幣が生まれ、人々は自分が働いた成果を、貨幣価値に換算して量り、交換するようになりました。社会は複雑になり、人々の世話をしたり、教えたり、癒したり、誕生や死をみとったりすることも、専門の職業がつかさどるようになりました。

機械を用いて集中的に生産を始めたことは、私たちが働いてきた歴史の転換点でした。労働は生産を最大化するための掛け算の道具としてあつかわれるようになりました。大量に生まれるモノは、私たちの暮らしを劇的に安全で豊かなものにしましたが、それを生み出す過程には多くの困難も生まれました。

こんにち、私たちはそれぞれの職業について、働いています。一つだけの人もいますし、たくさんの職業を持つ人もいます。生涯のうちに、様々な職業を渡っていく人もいます。それぞれの立場で社会に働きかけることで、お金を受け取り、暮らしをたてています。

みんなが各々の立場で働くことで、大きな社会全体が成り立っています。その様子は、まるで大きなハチの巣に暮らす働きバチに似ているかしれません。働きバチもまた、生まれてからいくつも仕事を渡っていくのだそうです。巣穴の掃除、エサやり、花粉やミツの倉庫番、外勤になってミツ集め…といったように。たくさんの仕事が組み合わさって、大きな社会を暮らし良いものになっている姿は、人間社会のミニチュアといえるかもしれませんね。

働くとは「自然と社会から収穫を得る」こと

こうして見てみると、「働く」ということは、本来「人間が自然に働きかけ、そこから収穫を得るプロセス」であったと言えます。原始社会ではだれもが自然に対し直接働きかけて、衣食住に必要なものを採集して生きてきました。しかし、人の役に立つものを創り出す人、人と人の間に立って働く人が、次第に現れてきました。現代はそれらの役割が職業として細かく分かれ、つながって社会を作り、自然からの収穫を受け渡しています。

おにぎりを例にとりましょう。農家が米を収穫します。農協がその米を買い取ります。卸売業者がそこからさらに買い取り、仕分けます。続いてスーパーマーケットがそれを買い取り、配送業者が店舗まで運びます。そして私たちがレジでお金を払い、誰かが作って販売した炊飯器で炊いて、おにぎりが完成します(うまい!)。自然からの収穫が私たちの口に入るまでの間には、たくさんの人の労働が加わっています。

こうしてみると、私たちが毎日食べているものは、自然そのものの一部でもあり、自然に対して人間がなした、労働の一部であると言えるでしょう。そして私たちもまた、自分の時間と、肉体的・精神的な能力を社会に投入することで、収穫物=お金を手に入れているということです。現代の人々は「労働する社会」の中で暮らしているということですね。

働くこと、それは人間の根っこにある気持ち

私たちの働いてきた道のりを、振り返ってみました。では私たちは、働くことについて、どのように感じてきたのでしょうか？

皆さんご存じの「枕草子」に「うつくしきもの」という段があります。次のような文章です。

「二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。」

(現代語訳)

「満年齢で1~2歳くらいの子供が、元気にハイハイしてくるときに、床に超ちいさいゴミが落ちてるのを見つけて、ちっちゃい指で拾って、大人に見せてくれるのって、超かわいいよね!」

平安時代でも現代でも、大人はきっと「ありがとうね!」と言って、そのゴミを受け取ることでしょ。本当にかわいいものですよ。

子供は日々成長しています。やっとハイハイできるようになった子供が、小さなゴミを見つける。つまんで拾うことも、できるようになったことの一つです。何かわからないけど、子供にとっては価値があると思えたものなのでしょう。それを、見守る大事な人に渡してくれる。大人はそれを受け取り、「ありがとう!」と言う。子供は、自分がやったことで、他者が喜ぶという体験を得ます。自分が習得したわざを生かし、世の中に働きかけ、成果を得るという経験が、このかわいらしい行為の中に含まれているのです。この経験、原初的な喜びこそが、働くことの原点ではないでしょうか。

働くことは喜びに満ちている!

類人猿を観察したり、児童心理の発達や成長を調べた研究があります。それらを読み解くと、私たちは働くことに対して、次のような喜びを感じるようにできているのではないかと思います。

まず、基本的な喜びは3つあるでしょう。

1 「できる」ことの喜び

自分の能力を使って何かを成し遂げることには、根源的な達成感があります。

2 「成長する」喜び

知識や能力を成長させることです。できることが増えると嬉しいですよ。

3 「報酬を得る」喜び

食物やお金、他者からの感謝です。

これらは、おそらく人間が動物だったころから変わらない、働いて生き延びるために脳に埋め込まれた、喜びを感じる回路です。これらに加えて、人間が自我を持ち、複雑な社会生活を営むようになったことで、さらにたくさんの喜びを労働から感じとるようになってきたのではないのでしょうか。それらには次のようなものがあります。

4 「好きなことをする」喜び

感覚的に気持ちいいものを行う、作る喜びです。演奏家であれば、自分が美しいと思う音楽を作り出し、それを耳で聞き、自ら味わう喜びがあります。スポーツ選手や職人のように、体や手先を動かすこと、そのものが楽しいということもあります。販売員が、他者に働きかけて、共感や同意を得る喜びもあるでしょう。

5 「自分で仕事のやり方や中身をコントロールする」喜び

やるべきことを自分で決める、または、やり方を自分で決められる、そんな仕事であれば、喜びを感じられます。工場のライン作業であっても、作業の手順や、体や物の動かし方を自分で工夫することで、喜びが得られます。

6 「新しいものを作り出す」喜び

個性を発揮し、オリジナルなものを作り出すことには喜びがあります。常にこれ1点、という物を作っている人だけでなく、毎日同じものを作る人でも、取り巻く環境に対応して作るということは、常に新しいものを作り出していることです。

7 「新しい環境に身を置く」喜び

同じ場所、環境で過ごすのではなく、常に新たな環境でチャレンジすることで探求心、冒険心が満たされる喜びがあります。

8 「人とつながる」喜び

様々な人とうまくつながりを作って協力することで大きな成果が得られます。価値を共有し、互いに献身する喜びがあります。いっぽうで、異なった個性に触れあうことで、新たな価値観を得られる喜びもあります。

9 「社会に役立つ」喜び

目の前の人だけでなく、広い社会を想像して、その中で求められる役割を果たしていると実感することで、喜びが得られます。

働くことの根本には強制がある

すごい!働くことの喜びは9つもあるんだね。働くことは楽しいことなんだ。労働ばんざい!将軍様!...と言いたいところですが、実際には皆さんよくご存じの通り、バラ色に満ちたものではありません。そこを考えてみましょう。

すでに見てきたとおり、働くことは、自然や社会に働きかけて、収穫を得ようとする試みです。だから、成果が必要になります。個人で働くにせよ、組織で働くにせよ、成果を求めるためには、一定の肉

体的精神的な負荷がかかるものです。楽しく海辺で時を過ごしたから、魚は釣れなかったけど良い一日だった、と考える釣り人はいるでしょうが、漁師にとっては重い疲労が残るばかりです。働くとは毎日を生き延びるための営みです。

また、働くことは、人間が作る社会の中で、互いに競い合うことでもあります。自分と他者とはつねに比較されます。その中で自分の価値を認めさせるために、自由な意志を抑圧したり、耐えられる負荷を超えて働かなければいけないことがしばしば起きます。

それに、競い合うだけでなく、お互いの利害が衝突することもあります。自分の収穫を求めて働くとき、社会の誰かが同じく生きるために働くのと、ぶつかることがあります。互いに妥協するのか、相手を屈服させるまで戦うのか、いずれにせよ楽なことではありません。

そして、社会全体を見わたしたとき、誰もが希望する仕事に就けるとは限りません。また、みんなが希望する仕事だけに就いていたら社会全体が最適なものにはならないでしょう。辛い仕事、きつい仕事、危険な仕事も、誰かがやる必要があります。

だから働くことは苦しい

現代において働くことは、社会に働きかけることです。だから、今の社会に合っていない働き方、またそのような組織で働くと、労働に対して収穫は少ないものとなります。

組織に属して働くか、個人で働くかという選択もあります。組織に属し、チームとして協力することで、たくさんの収穫を得られるメリットがあります。しかし、チームの中での利害の衝突や、分配の問題は常について回ります。

いっぽう、個人で社会に向き合うこともできますが、複雑すぎる社会の中で、常に自分の立ち位置をはかり、腕を磨きやり方を工夫して収穫を得つつけるのは、非常に困難なことです（半面、充実もあることでしょう）。

また、社会はあまりに複雑化し、無数の機械やシステムの中で私たちは働いています。仕事は細分化され、常に他者の評価に依存して束縛され、自分でコントロールできないものになっています。このため目の前の仕事をする目的が見えにくくなり、自律して働く喜びも失われました。

働くことは、これからどうなっていくんだろう？

私たちを取り巻く環境や社会は、変わり続けてきました。これからも目まぐるしく変わり続けるでしょう。そんな中で、私たちの「働く」は、これからどうなっていくのでしょうか？

Ⅰ 働く時間は短くなるが、そうでない人もいる

まず、働く時間は、世界でも日本でも、次第に短くなってきています。産業革命後の世界では、機械を最大限に稼働させるため、働く時間は極大まで長くなりました。そこから生まれた苦しみや矛盾に対抗して労働運動が生まれ、長い戦いを経て法律が整備され、働く時間が短くなってきました。

世界的に働く時間が短くなる傾向は今後も続きます。これは技術革新によって働く効率が上がり、生きるために必要な収穫を短い時間で手に入れることができるようになっていくためです。私たちの

技術が進歩し続ける限り、この傾向は止まらないでしょう。日本でも全体的に言うと、みんなの働く時間は減り続けているように見えます。長時間働く人の割合も減ってきています。

しかし、よく見ると、内実はそう単純ではないようです。正社員として働く人については、労働時間はあまり減っていません。今まで通りフルタイムの残業有りで働いています。老人や女性などを中心に、非正規雇用の短時間労働者が増えてきたことで、見かけの平均労働時間が減っているのです。

AIやロボットが次々と導入される職場では、一人当たりの生産性は向上していきます。また、残業規制が進み、週休3日制を導入する会社も現れており、今後も働く時間は減るでしょう。とりわけ、いわゆる成果主義の働き方がされている業種ではその傾向は進むでしょう。

いっぽうで、「その時間そこにいることが仕事である仕事」では、働く時間はなかなか減らないのが現状です。例えば、警察や消防、介護や保育などの業種です。

2 さまざまな時間や場所で、複数の働き方をするようになる

仕事をする環境や中身も変わってきています。リモートワークが可能な業種では、自宅に居ながらにして、オフィスと同様の仕事をするができるようになってきています。ビーチでも温泉でも働けます。

ひとつの仕事に縛られず、副業やスポットワークというやりかたで、自分の時間を複数の仕事に振り分けることができるようになってきました。少し未来の私たちは、ひとつの会社に所属するという働き方ではなく、それぞれの仕事で、求められるさまざまな技能や人格を発揮して働くようになっていくでしょう。

3 これまで想像もつかなかったようなことが職業になる、今の職業の中身も変わる

AIやロボットによって、無くなる仕事・増える仕事の変化は、とりわけ劇的なものになるでしょう。新しい技術を使って、どのように世の中に働きかけ、人の役に立って報酬を得ることができるのか？これから働く人にとって、自分の職業を選ぶ、あるいは創ることは、とりわけ自由度が高く、また難しいものになるでしょう。今働いている人にとっても、無くなりゆく仕事から、AIやロボットを使いこなす仕事に、働く中身を変えていくことが、生き延びるために欠かせないことになってきます。

「働くことが未来を創る」

私たちの「働く」は、これからどんどん変わっていきませんが、変わらないこともあります。それは、「働くことが、未来を創り出す」ということです。働くことは、自分を作り、まわりの人を動かし、社会を変えていきます。

まず、働くことは自分自身の未来を創り出すことです。日々の仕事に直接必要な知識や技能、資格を習得することは、働くために不可欠なことです。また仕事での成功体験や失敗から学びや反省を得て人格が磨かれていきます。毎日顔を合わせる同僚や仕事先との人間関係は、社会の多様性に目を向けさせてくれますし、しばしば自分の成長につながるものです。

働くことによって、自分の身近な人々の未来も創り出すことになります。仕事相手に対し、自分の仕事で貢献できたとき、相手の仕事もまたうまくいくことになります。同僚や上司部下とうまく協力して働く成果を出せたとき、お互いに満足することができ、次の仕事に生かせる成功体験が得られます。もちろん、働いて持ち帰ったお金で、家族や愛する人の未来を豊かにすることもできます。

そして私たちの社会や世界も、働くことによって創られてきたものです。日々新しい技術が開発され、私たちの暮らしは安全で快適なものになってきました。住む家や働く場所、それを結ぶ道路も、みんな誰かの働きでできています。若い人たちに教育をすることによって、未来を生き延びるための知恵と意志を伸ばします。環境問題や、戦争や貧困といった、世界が今苦しんでいる問題が少しでも良くなるよう、たくさんの方が取り組んでいます。

でも働くだけでは生きていけない

働いて未来を創っていく、美しいですね。でも、24時間働けますか？やっぱり働くことはとても大変なことです。肉体的にも精神的にも負荷がかかります。1日のうち、一定の時間を休息と余暇に割り当て、それによって心身のバランスを回復する必要があります。

休息は言うまでもなく大事ですね。疲れたら早く寝て、心と体を休めましょう。

一方で、働くこととは異なる肉体的・精神的な活動を行うことで、心身を回復させるやり方もあります。これが余暇ですね。

余暇に行う生産的な活動の代表例、それがサンバ

その昔、余暇とは、王や神から与えられた聖なる祝祭の時間であったといえます。日常のヒエラルキーを逆転させ、異なる時間や秩序に身を置くことによって、労働に集中された肉体や精神を解きほぐし、人間と社会とを解きほぐすものでした。

近代に入り、余暇は労働者の権利として確立しました。一方で「余暇産業」が誕生し、人々は労働によって得られた金を消費し、刺激を得ることを余暇とするようになりました。

しかし、余暇を単なる消費活動とせず、仕事とは別の価値を生み出す生産活動として楽しむやり方もあります。その代表例ともいえるのが、サンバです。

労働からサンバが生まれた

サンバは、20世紀初頭のリオデジャネイロに生まれました。急速な都市化と産業化が進む時代でした。職を求めてブラジル北東部からやってきた黒人たちは、都市の片隅にまとまって暮らし、製造、小売、その他さまざまな都市雑業に従事しました。差別を受ける中で、社会的地位の上昇は望むべくもありませんでした。

そうした中での労働は、まさに生きるために最低限の必要を満たすためのものでした。雇用は不安定で、毎日が不安の中にありました。仕事にありついても、その多くは単調な作業であり、自由意志や創造性を奪われたものでした。一方で長時間の拘束やノルマを課せられ、休暇は少なく、働き続ける日々の中で労働者は孤独でした。

そのような近代的労働に挟まれた、わずかな余暇に生まれたのが、サンバという遊びでした。

サンバは自由な創造性を発揮できるものでした。労働の苦しみや、それでも生きるための愛、希望を歌う。それに伴って即興で踊る。労働の中では使わない肉体や精神の部位を働かせることによって、人々は生きるために不足しているものを満たしました。

サンバはまた、自由を奪われ孤独に働く人々にとって、つかの間の休息に共同性を回復する手段でもありました。様々な地方から首都リオデジャネイロに出てきた黒人たちが、モーホ(※)に集住しました。彼らは、労働の後に、週末ごとに、サンバを奏でました。同じ境遇に暮らす人々と自由に目を合わせ、言葉を交わし、杯を交わします。そしてともにサンバを歌い踊ることで、喜びを共有しました。そこではそれぞれの故郷のリズムや信仰がまじりあい、新たな文化が生まれました。

こうして、彼らが住むモーホには、サンバを愛し、サンバに生きる共同体が生まれました。サンバは厳しい労働の影から生まれ、遊び心や創意工夫を糧に、発展してきました。人々はそれを目当てに集い、自らもその一員となって楽しむことで、新たな表現を生み出してきました。とりわけ、毎年のカルナヴァルにサンバが組み込まれることで、サンバは地上最大の祝祭として大きな発展を遂げてきました。それは労働とは異なるやり方で、人類が全身全霊を注いで作り上げてきた、偉大な文化遺産です。

※モーホ:リオデジャネイロ市内に多数ある丘。電気や水が整わず不便。黒人たちが流入して貧民街を形成しました。

働くことと同じように、遊びも未来を創り出す

私たち人類は、サンバをはじめとして、余暇の間に行う遊びにも、大きな力を注ぎ、成果を作り出してきました。では、そもそも遊びとは何でしょうか？

遊びとは自由意志に基づき、創造性を発揮し、知性や肉体の能力を投入する、それ自体が快感であるような活動であると言えるでしょう。私たちは、働くことだけでなく遊びによっても、社会に働きかけて、達成や成長、有形無形の報酬など、両者に共通する喜びを得ようとしています。つまり、遊びは、多くの面で働くことと共通しています。異なるのは、成果が必須ではないことと、また自由意志や創造性がどこまで発揮されるかということです。

こんにち、私たちの働く時間は全体として減ってきており、余暇の時間が増えています。余暇を使って、創造的に遊ぶことで、働くこととは違う形で、自分と社会を良くしていくことができます。

芸術やゲーム、スポーツなど、今は仕事として成り立っているものも、はじめは遊びから始まりました。人類にとって、それらが大事なものであることは言うまでもないでしょう。人はその長い歴史の中で、遊びを楽しみ、遊びから様々なものを創り出してきました。遊びもまた、私たちと世界とを、創り上げるものなのです。

サンバは究極の遊びである

職業としてサンバにかかわる人もいますが、大多数の人々は、余暇を使ってサンバを行っています。お金という形で報酬を得ることはできませんが、自分と社会にとって大事な価値をもたらしています。

サンバとは、まず第一に、根源的な快感です。リズムを奏で、歌い踊ることで、心と体にこの上ない快感が得られます。創造的精神を発揮し、美しいものを作り出す喜びがあります。

サンバは、自分を育て、新たな自分を作る源です。鍛錬によって表現の技術を高め、できなかった難しいことができるようになっていきます。また、多くの人々との共同作業を経て、自分をコントロールし、集団の中で力を発揮するやり方を学びます。仲間同士が切磋琢磨し、お互いを育てあうことができます。仕事とはかけ離れた、遊びの世界に没頭することで、もうひとつの自分に出会い、磨いていくことができます。

サンバは、人と人をつなぎつけます。ともに一つの音楽を楽しむ瞬間、心身の動きはシンクロし、歌声は一つになります。互いにまなざしを交わせば、心の芯の深いところまでつながりあい、孤独が癒されます。サンバを愛する人々は、余暇の時間を投じて交流しあうことで、家族のようにお互いを気遣い、人生の大事な部分を共有する共同体が生まれます。

サンバは、社会にとって必要な価値を生み出します。見る人聞く人を楽しませ、自由に表現することの価値を伝えます。サンバの音色が街に響き、人々の心に、鮮やかな高揚感を立ち昇らせます。サンバはその街に住む人々の誇りとなっていきます。サンバで結ばれた共同体は地域に根付き、愛し愛されるものとして末永く続いていきます。

サンバとは、究極の遊びです。人々にとって、働くことから得られない、足りないものを補い、労働とは異なるやり方で自分や社会を豊かにします。サンバを通じて自分に、地域に、社会に種をまくことで、将来大きな成果となって返ってきます。それは人々が人生に夢や希望を描くための、もう一つの広大なキャンバスなのです。

2026サウーヂのテーマは「働こう!サンバしよう!ともに未来を創り出そう!」

何とか結論にたどり着いてきました。働くことは私たちと社会にとって、欠かせないものです。それに加え、遊びを通じて新たな価値を創造することも、これからますます大事になってきます。サンバは、それを100年も前から実践してきました。

働くこともサンバすることも、究極的には、自由を生み出し、表現するいとなみです。自分の全てを表現して、世の中にかかわることで、世界をより良いものにしていくことができます。働くこととサンバは、車の両輪です。

2026年の夏、私たちサウーヂは、次の言葉をテーマに掲げて、浅草でデスフィーレします。

「働こう!サンバしよう!ともに未来を創り出そう!」

みんなが働きながらサンバを作っていきます。1年間悩み、楽しく創り上げます。私たちがお届けする、働くこととサンバで創り出す未来を、どうぞお楽しみに!

2026 G.R.E.S. Saúde Yokohamanguera

<要約版> (だいたい人力。AIも少し使用)

人類は、その誕生以来、働き続けてきた。衣食住を満たす営みが分業し、農耕や都市を生み出した。あまたの職業が生まれ、組み合わせあって社会を作った。人々はそれぞれの職業について、貨幣を交換しながら、自然から得た恵みを分配している。自然と社会に働きかけて収穫を得ることで、毎日の暮らしを作り、少しずつ社会を豊かにしてきた。さまざまに分業して社会を支える、働きバチのように。

「世の中に向けて、自分ができることを成し遂げ、報酬を得る」これが働くということである。幼児がゴミを拾ってくれるように、働くことの喜びはわたしたちの気持ちの根っこにある。好きなことを自分のやり方で行き、新しいものを創り出し、日々成長して社会に役立つ。そのように働けたら理想だろう。

しかし、労働には成果が不可欠だ。このため働くことは楽ではない。常に出来高や競争、他者の評価にさらされ、自由は失われる。希望する仕事に就けず、公平な評価や分配も受けられない人々が、現代社会にはあふれている。

人々の働く時間が次第に短くなり、場所や働き方も多様化してきている。技術の進歩で無くなってしまう仕事、新たに生まれる仕事があり、誰もがこの荒波を乗り切っていかなければいけない。しかし「**働くことが未来を創る**」ということは変わらない。自分を育て、身近な人や社会をより良いものに変えていく。

働くためには、休息と余暇が必要だ。余暇は単なる消費ではない。仕事とは異なることに心や体を使うことで、労働に疲れた心身を回復させる活動である。

20世紀初頭のリオデジャネイロで生まれたサンバこそが、その代表である。苦しい労働のはざまでも、わずかな休みの時間に太鼓を打ち鳴らし、歌い、踊ることで、人々は自由を取り戻した。サンバは、働く者たちの魂の叫びであり、生きることへの讃歌であった。

サンバを愛する人々が集まり、共同体を生み出した。多様な人々が交流し、遊び心や即興精神を発揮して、新たな文化を創り出した。毎年開かれるカルナヴァル。それは地上最大の祝祭。そこで演じられるサンバは、人類が全身全霊を注いで作り上げてきた、偉大な文化遺産である。

仕事だけでなく、余暇に行う遊びによっても、未来を創り出すことができる。その究極がサンバである。サンバによってもまた、自分を育て、身近な人や社会を良くしていくことができる。それは私たちが人生に夢や希望を描きだす、広大なキャンバスである。

働くこともサンバすることも、車の両輪である。それらは自分の全てを表現し、世界をより良いものにするといなみである。

「働こう!サンバしよう!ともに未来を創り出そう!」

悩み、苦しみながらも、笑いと喜びを追い求め、創り上げる輝かしい未来を浅草でお見せします。お楽しみに!

2026 G.R.E.S. Saúde Yokohamangureira